周産期における B 群溶血性連鎖球菌(GBS)の感受性推移及び外来由来株との比較検討

◎谷川 翔平[1)]、木下 愛[1)]、塚口 扶美枝[1)]、池本 敏行[1)]
滋賀医科大学医学部附属病院[1)]

【目的】*Streptococcus agalactiae*（Group B streptococci：GBS）は新生児早発型 GBS 感染症の原因菌であり,1 万出生に１人と頻度は高くないが新生児の予後不良に大きく関わる。そのため産婦人科診療ガイドラインでは周産期の妊婦に対し GBS の保菌検査が推奨されている。近年,ペニシリン低感受性 GBS を含めた薬剤耐性化が注目されている一方で,周産期に限定した薬剤感受性率の報告は多くない。当院では周産期 GBS 保菌検査にて検出された GBS は全例感受性検査を実施している。そこで,当院で周産期保菌検査を実施した患者及びそれ以外の外来患者から分離された GBS の薬剤感受性を調査し比較検討を行った。

【対象】2016 年から 2020 年までに当院で周産期 GBS 保菌検査を実施した患者とそれ以外の外来患者から分離された GBS それぞれ 319 株,217 株を対象とした(1 患者 1 株)。
対象薬剤はAmpicillin (ABPC), Penicillin G (PCG), Ceftriaxone (CTRX), Cefepime (CFPM), Meropenem(MEPM) ,Azithromycin (AZM), Clarithromycin (CAM), Clindamycin (CLDM) ,Vancomycin(VCM), Gatifloxacin (GFLX), Levofloxacin (LVFX) とし,感受性率の比較を行った。薬剤感受性検査はドライプレート（栄研化学）を用い実施した。

【結果】周産期におけるPCGの感受性は2019年98.7%, 2020年は98.9%であり,一部非感性株が存在した。ABPC, CTRXにおいても,2019年まで100%であったが,2020年には 97.9%, 98.9%の感受性率であった。CLDM, LVFXはそれぞれ 2016年が84.6%, 92.3%だったのが2020年は77.7%, 79.8%とやや耐性傾向がみられた。周産期とそれ以外との間に感受性率の差はほとんど見られなかった。

【考察】周産期 GBS 保菌検査において一部非感性の株が存在した。ペニシリン低感受性 GBS は高齢者での分離が多いとされるが,周産期保菌検査においても検出される可能性が示唆された。検出率が少ないものの,今後も GBS の薬剤感受性率の動向に注意する必要がある。

連絡先 077-548-2607